

<b>Title</b>	カッシーラーのシンボル哲学：言語・神話・科学に関する考察
<b>Author(s)</b>	齊藤, 伸
<b>Citation</b>	2010 年度 博士論文 要旨
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=3786">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=3786</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

2010 年度

博士論文 梗概  
(指導教員 金子晴勇教授)

カッシーラーのシンボル哲学

——言語・神話・科学に関する考察——

聖学院大学大学院  
アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科  
(博士後期課程)

学籍番号 108DC003

名前 齊藤 伸

本論文はカッシーラーの『シンボル形式の哲学』の構成に従いながら、それぞれの主題に関する彼の思想を六つの視点から解明する試論である。そして全体としては、付論として加えた彼の「宗教理解」と、訳出した彼の論文を付属資料として含めて八つの論文から構成されている。そこでここでは梗概として各章にて扱った議論の内容を要約する。

第一章では「現代ドイツにおける言語論のあゆみ」と題し、ヘルダーからヴィルヘルム・フォン・フンボルト、そしてカッシーラーへと継承される言語論の系譜を辿った。近現代におけるドイツ観念論の言語論は、ヘルダーの『言語起源論』(1770)を始点としており、そこから更に言語の探求を深化させたフンボルトの言語論はヘルダーと同様に現代にも依然として大きな影響を与えている。ヘルダーの『言語起源論』が画期的なものとして評価されたのは、それが単に言語だけを問題としたのではなく、むしろ精神の現象を明らかにしようとした点である。彼は言語が人間のみにも与えられた特殊能力であるという確信から、彼自身の直観的な思索によって人間と動物との間に判然と境界線を引いた。ヘルダーにとって人間の言語とは、神から与えられたものでも、または所謂「動物言語」から発達したものでもない。それは種としての人間に理性と共に固有な機能である。彼は言語の「発明」がいかにも人間にとって必然的であったかを、精神的な発達という観点から明らかにしたのである。そしてヘルダーの思想を継承してそれをさらに発展させたフンボルトは、主著である『言語と精神』において、実際に言語構造の相違という観点から言語論を展開する。フンボルトによれば、言語は第一に主観と言われる「民族の精神」によって生起するが、そこには「内的言語形式」という普遍的な知的機能が関与している。そのため彼にとっての言語は、主観と客観とが混入した「機能」として理解される。そしてこの機能は、精神の全ての力と不可分の統一体を成すものと言われ、言語の使用は人間に固有の「衝動」に起因すると説かれた。このような18世紀の言語論を、20世紀の文化哲学または哲学的人間学の観点から再び採り上げ、新しい言語論を確立したのがカッシーラーであった。彼は『シンボル形式の哲学』第一巻と『人間』において、言語論をシンボル論へと発展させることによって、その射程を文化全体へと拡張した。そこでは彼以前の言語論の歴史的な考察を通じてシンボルとしての言語が、いかにも人間の文化的生活を可能とさせる根源的な力であるかが問題とされる。これらの著作にはヘルダーとフンボルトの言語論からの影響が色濃く現れているが、カッシーラーはこれらの議論を現代の諸科学の成果を基にして論証しつつ、それらを言語だけに留まらずに「シンボル」として他の領域へも適用する。カッシーラーにとって言語は、「シンボル形式」の一つであり、人間の文化を創造する根源的な

認識機能として捉えられた。彼によれば人間は「命名」の行為によって、多様な個別的対象を流転する世界から切り取るのであり、与えられた名称によって対象そのものではなく、それを一つのシンボルとして認識する。そのためここでは精神的発達によって、いかにして人間がシンボルとしての言語を獲得し、そしてそれがどのような機能をもつとカッシーラーが主張するのかを論じた。

続く第二章では、『シンボル形式の哲学』第二巻「神話的思考」と、『言語と神話』において展開されている彼の神話論を考察した。カッシーラーの神話論においては、始源的なシンボル形式としての「神話的思考」が極めて重要な役割を果たしている。なぜなら言語や宗教といった高度に抽象化された「シンボル形式」は、カッシーラーによると、根源的には直観的な「神話的思考」にその根源が見出されるからである。そのためヘルダーが「魂のことば」から言語の起源を探究したのとは相違して、彼は人間における「神話的思考」の考察から「シンボルの起源」を問うた。したがって本章は、言語を問題にした第一章と極めて密接な関係にあり、カッシーラーの神話論が言語論といわば表裏一体の関係にあることを解明した。彼は『言語と神話』において、ヘルマン・ウゼナーが提唱した「瞬間神」(Augenblickgötter) という概念を用いて、神話的思考の発達を段階的に考察する。この神概念は極めて重要な意味をもっており、原初における神話的思考は直観的な思考であったが、それは精神・言語の発達と平行して発展し、そこにはやがて抽象的な科学的思考に至る萌芽が見出されるとカッシーラーは言う。そのため神話的思考と言語の発達は同じ過程の問題として論じられた。このような言語論と神話論との関連性は、言語と神話が「同じ根から出た二つの異なった芽」<sup>1</sup>であるという彼の言葉によって明瞭に言い表される。

第三章と第四章では、『シンボル形式の哲学』第三巻「認識の現象学」の考察を行った。この巻は大きく分けて二つの主題から論じられており、本稿ではそれぞれを分けて考察しており、それによって彼の問題意識を明確に解明しようと試みた。したがって第三章では「シンボルの含蓄」(symbolische Prägnanz) というカッシーラーのシンボル哲学全体を基礎付ける独自の機能を考察した。この機能は、言語や神話といった「人為的なシンボル機能」ではなく、それらよりもいっそう根源的な「自然的シンボル機能」を意味する。すなわち彼によると、人間の感覚に与えられる印象の中には、精神がそれへと志向する以前から普遍的な「意味」がその中に含蓄されているのである。彼はこうした先験的な「意味」付与の作用を含蓄機能によって考察し、認識において主観的でありながらも「客観」的意

---

<sup>1</sup> Cassirer, *An Essay on Man*, 1944, p.109 (『人間』宮城音弥訳、岩波書店、1997年、235頁)

味を可能にする人間精神の作用を明らかにする。この認識と対象との構図は、彼の「シンボル哲学」全体を基礎付ける第一の原理として理解されなければならない、極めて重要な意味をもっており、ここから彼は精神の「再現前化」の機能によって認識が成立すると主張した。

そして第四章においては、『シンボル形式の哲学』第三巻の後半部分、そして全4巻からなる大著『認識問題』を参照しながら、カッシーラーが「人間文化の最高にして、最も特徴的な成果」と言う科学および科学的思考を問題にした。人間が神話的な呪術や祭祀から脱却し、「科学」を獲得したことがその生活に極めて大きな影響を与えたことは言うまでもなく、カッシーラーは科学を生み出すその思考様式をシンボル形式との関連から考察する。神話的思考から出発した人間の思考が最後に到達するのが科学的思考であり、そのためカッシーラーはこの思考形式を神話的思考との比較的考察から開始する。科学的思考は人間の思考形式で最も高度に抽象化・客観化された形式であり、彼によるとそれはまさに人間にとって新たな認識の道を切り開く機能そのものである。というのは彼によると、神話的思考が、外的な感覚印象から受け取る与件に含まれる要素を通覧して論証的に

(diskursiv) 認識するとしても、科学的な世界概念はそうした通覧の仕方を新たに創り出す点に異なった特徴があるからである。そのため科学的思考は、人間に新たな認識の可能性を与える創造的な機能として理解された。

さらに第五章では、未完に終わった『シンボル形式の哲学』第四巻に所属する『精神と生命』(1928) および『現代哲学における<精神>と<生命>』(1930) という二つの論文において展開されているカッシーラーの心身論を採り上げた。人間における精神と生命の問題は、ヨーロッパの哲学において長く主要な問題の一つであり続け、20世紀初頭においてもその問題は未だ多くの議論を生み出していた。しかしながらカッシーラーは当時流行していた「生の哲学」に加担することもなかったし、またはシェーラーのように心身の二元論を強調することもなかった。そのため彼の心身論は独自の立場、すなわち「シンボル形式の哲学」との関係から、人間の精神と生命を「対極的」な構造として捉える視点から解明した。この心身の対極性という視点は、広義での「二元論」ではあるものの、「同一哲学」や心身を別次元に属すものであるかのように見做す「二元論」を超克する試みとして有意義である。ここでカッシーラーは、とりわけジンメル<sup>1</sup>の生の哲学やシェーラー<sup>2</sup>の哲学的人間学が孕む問題点を超克しつつ心身論を発展させている。本章では上述の二つの論文を基礎としながら両者を対比的に考察することによって、彼の心身論の解明を試みた。

第五章までが一貫して『シンボル形式の哲学』を中心とする考察であったのに対して、最終の第六章では、彼が『シンボル形式の哲学』の「説明であり、例解である」と位置づける晩年の著作『人間』（1944）を問題にする。亡命先のアメリカにて著されたこの著作は、単にそれまでの著作の要約と考えられてはならない。とりわけこの著作の最初の三章では、新たにユクスキュルによる生物学的な環境理論を人間学的に発展させ、人間を「象徴的動物」と定義したことによって自身の「シンボル哲学」を完成させている。ユクスキュルは生物の反応が「感受系」と「反応系」という2次元的な「機能的円環」によって束縛されていることを主張したが、カッシーラーはこの構図に「象徴系」という人間のみに与えられた第三の連結を導入する。これまで「シンボル形式」が人間のみに特徴的な機能であることを精神の現象の中から考察してきた彼は、『人間』に至るとそれを他の諸科学の成果を基にして、新たに独創的なシンボル論を展開するに至る。

終章においては本稿全体を総括した後に、カッシーラーの「シンボル哲学」が与えた後世への影響を論じた。そこではカッシーラーの後継者と呼ばれるアメリカの哲学者 S.K. ランガーの哲学を考察した。彼女は『シンボルの哲学』（第三版 1956 年）の中で、「シンボル」こそが現代における哲学の問題を包括し、さらに新たな思想を生み出す「創造的観念」(generative idea) であると言う。そこでランガーは、精神の現象を主要問題としたカッシーラーの哲学を基本としつつ、いっそうシンボルそのものの探求を推し進めることによって、新たな言語・芸術論を展開する。こうして彼女の哲学を、カッシーラーのシンボル哲学との比較的な視点から考察することによって、精神の現象学としてのシンボル理論と、文化理論としてのシンボル理論を相補的に理解することが可能になるとと思われる。

本稿の最後に付論としてつけ加えたのが「カッシーラーの宗教理解」である。ここでは名著として名高い『啓蒙主義の哲学』および『カントの生涯と学説』、さらには『18 世紀の精神』を中心として、カッシーラーが 17 世紀から 18 世紀における啓蒙主義の宗教思想を、いかに理解するかを論じた。彼の啓蒙主義に対する理解は、無神論やニヒリズムが蔓延する現代世界において、再度宗教が果たしうる本来的な役割を捉え直す契機になるのではないかとと思われる。というのもユダヤ教徒であるカッシーラーが、宗教と理性との関係を歴史的に考察したこれらの著作においては宗教が説くべき普遍的な道德律が強調されており、彼の理解は時代や民族の相違を超えて妥当するものだからである。しかしながら、宗教とその信仰の問題は、現代においても大きな意義をもつとしても、それは本稿の主たる関心である「シンボル形式」とは直接的な関係をもたないために付論とした。

聖学院大学大学院  
アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科  
(博士後期課程)

学籍番号 108DC003

名前 齊藤 伸